

特集

新版教科書のご案内

光村図書の新しい中学校『美術』は、
授業の取材を重ね、生徒たちの声に耳をすまして、編集した教科書です。
この時代だからできる、新しい鑑賞体験を。
生徒たちがのびのびと自分の表現を追求できるように。
本特集では、編集に携わった先生方に、
新版教科書の魅力をご紹介します。

撮影 田尾沙織 (P.4)、鈴木俊介 (P.5~11)



座談会

生徒の姿が見える、ワクワクする教科書

令和7年度版中学校『美術』教科書の編集に携わった先生方に
新しい教科書の魅力を語っていただきました。

聞き手 光村図書出版 編集部



たなか しんじろう
田中真二郎

秋田県大仙市立
中仙中学校教諭



さら しな ゆき
更科結希

北海道教育大学附属釧路義務教育学校
後期課程教諭



すず き まさ ゆき
鈴木雅之

宮城県柴田郡大河原町立
金ヶ瀬中学校教頭



そん ちゃん で
宣昌大

大阪教育大学附属
天王寺中学校教諭



つづみ よし あき
堤祥晃

滋賀県高島市立
安曇川中学校教諭

生徒の姿が見える教科書に

——新版教科書は、現場で生徒たちと向き合っている先生方と何度も会議を重ね、編集していききました。それぞれどんな思いで教科書づくりに携わったのかをお話してください。

田中 生徒が教科書を見て「自分ならこんなものをつくりたい、やってみよう」と思えるような教科書づくりを目指しました。生徒が自分の思いや、中学生時代にしかできないことが素直に表現できるような教科書にしたいと思いました。

更科 掲載されている作品に迫力があって、生徒の目に飛び込んでくるような、ワクワクする教科書になるといいなと。ワクワク感はとても大

事。それが生徒の「もっとつくりたい、もっと見てみたい」という意欲につながりますから。もちろん授業をする先生方が使いやすいということも大事です。

宣 ただ作品が載っていて、そのための技法があるのではなく、生徒の思いが先にあって、その思いを表現するためにはどうすればいいかが載っている教科書。そういう教科書が求められていると思いました。

堤 作品だけでなく、生徒たちの活動の姿、そこにある生徒たちの思いが見える教科書にしたいと思いました。カタログ的に作品が載っているのではなく、授業や生徒の活動の様子が伝わる教科書です。

鈴木 私は光村図書の中学校と高等

学校の教科書編集に携わっていますが、光村の教科書はいつも「かっこいい」と感じています。見た目のレイアウトのよさはもちろん、実際の授業をしっかりと取材して、生徒の声に耳を傾けるなど、生徒の思いを大事にしている編集の姿勢もかっこいい。新版教科書でも、そのよさを大事にしたいと思いました。

生徒の試行錯誤が見える「みんなの工夫」

——光村図書では、平成28年度版教科書より、生徒の制作過程を丁寧に紹介した「みんなの工夫」というコーナーを設けています。新版教科書では、ここをさらにパワーアップしました。

鈴木 編集会議では、「生徒が試行錯誤しながら制作している様子をもっと伝わるようにしたい」と、何度も議論しましたよね。なので新版教科書では、生徒の思いや考えを吹き出しで示し、生徒が試行錯誤している思考の流れがわかるような紙面にしました。

田中 「私はこれを表したい」「そのためにどうしたらいいのかな」という思いや試行錯誤する様子が、非常によく伝わる紙面になりました。生徒が何を思って、どう工夫したのか、美術の学習でいちばん大事なところが見えますよね。

更科 「みんなの工夫」は、生徒はもちろん、新任の先生や免許外の先生方にとっても、いいコーナーだと思います。ここを見れば授業のイメージがもて、生徒のどんなところを見取るべきなのかがわかります。

——「地域の魅力を表すパッケージ」の「みんなの工夫」(『美術2・3』P.90～91)では、宣先生、田中先生、更科先生の授業を取材しました。

宣 デザインの授業は、課題があった、それを解決するという形にした



田中真二郎
たなか・しんじろう

秋田県生まれ。秋田県大仙市立中仙中学校教諭。宮城教育大学大学院修了後、宮城県私立高校非常勤講師、秋田県公立中学校教諭を経て、2022年より現職。2012年、博報賞受賞。著書に『中学校美術 題材&授業プラン36』(明治図書 2019年)。光村図書中学校『美術』教科書の編集委員。

いと思っています。私の学校は大阪にあるので、大阪をどうアピールするかを考えさせる題材にしました。最初に、大阪をアピールするための形や色を探してもらい、レポート形式で発表させました。自分の考えや工夫を、クラスで共有しながら制作するというのを意識しながら進めた題材です。

——パッケージの形を考えさせる際、数学科とのつながりも意識されていましたね。

宣 生徒たちは数学の授業で、多面体などの空間図形を1年3学期に学習します。数学の先生から、「空間認識が苦手な生徒は、平面を立体に変換するのが難しい」と聞き、美術の授業では、数学の知識を使いながら、実際に手を動かして平面から立体をつくらせようと思いました。

——田中先生は、いかがですか。

田中 やはりデザインは課題意識が大切ですね。私の場合は、まず地元のいろいろなお土産をウェブサイトで見せました。うちの地元のお土産は渋いデザインのものが多いので、それをどう改善すれば、幅広い層に買ってもらえるかを考えさせるところから始めました。この生徒は、秋田の名産である枝豆を使ったロールケーキのパッケージを、外国人観光客に向けてデザインしていました。

更科 私は、地元のお菓子屋さんに協力してもらい、そのお店のお菓子のパッケージをリデザインするという題材にしました。地元で愛されているお菓子を、もっと多くの人に買ってもらうためにはどうすればいいか、生徒たちは一生懸命考えていましたよ。最終的に、生徒がデザインしたお菓子のパッケージを、お店で販売してもらいました。

「みんなの工夫」

表現題材に「みんなの工夫」という、制作過程を丁寧に紹介したページを設けています。

自分の住む地域の魅力が多くの人に伝わるようなパッケージデザインを考える題材。

『美術2・3』P.90～91「地域の魅力を表すパッケージ」

表現 発想・構想 みんなの工夫 地域の魅力を表すパッケージをデザインする

大阪のシンボル、大阪城をアピールしたい。どんな形にすればよいか。

大阪城は季節ごとによさがある。四季の一つのパッケージで表すには、どうしたらよだろう。

箱の四つの面に、四季の風景を描くといかも。

数学の授業で学んだ多面体の展開図をもとに、形を考えてみよう。

アイデアスケッチ

生徒作品 大阪城の四季 紙、色鉛筆、ペン、アクリル 高さ21cm

作者の意図 大阪城は極で有名ですが、夏、秋、冬もそれぞれ魅力があることを伝えるため、箱の側面を使って四季を表しました。

上の写真は春と夏、下の写真は秋と冬を描いた面。

秋田名産の枝豆を使ったお菓子をデザインしたい。外国人観光客をターゲットにするなら、どんなデザインがよだろう。

アイデアスケッチ

外国人観光客向けに、シンプルでスタイリッシュなデザインにしたい。英語の表示も入れよう。

生徒作品 枝豆ロールケーキ 紙、写真、筆、ペン、ペン 高さ10cm

作者の意図 誰でも手に取りやすいようにシンプルにしました。外国から来た観光客向けに、商品名は英語でも表記し、上面には、はんこ風に「秋田県産枝豆」と描いてアクセントにしました。

お土産売り場で積まれても目立つように、側面に枝豆の形をした色紙を貼って、商品の特徴を示そう。

外国人の目に留まるように、商品名は筆文字にしよう。

作者のインタビュー動画 QRコードから、作者である生徒のインタビュー動画が視聴できます。作品をつくるときに工夫したところ、苦労したところなどを聞き、5分程度の動画にまとめました。

苦労したところは？

側面の布地を想像して描いたりするのが難しかったです。

どんな材料を使いましたか？

画用紙とアクリル絵の具と色鉛筆

タンチョウは、羽を広げたところがいちばんカッコいい。この姿をできるだけ目立たせたいな。

パッケージに持ち手があると便利だ。タンチョウの羽の部分を持ち手にするといいかも。

タンチョウウらしきを表現しつつ、持ちやすい形にするために、羽の部分に工夫しました。

白のタンチョウに、赤の文字を入れたら目立つかな。

きちんと閉じられるように、裏に紙を差し込む穴を空けよう。

数学科とのつながり

パッケージをつくる時は、数学科で学んだ多面体や角錐、円錐などの立体の特徴や、展開図のかき方を思い出そう。持ち運ぶ、売り場に並べる、積み重ねるなど、パッケージの使い方を踏まえて、最も適した形を考えよう。

さまざまな展開図

四角柱の箱の例

三角錐(正四面体)の箱の例

さまざまな立体的な展開図を見てみよう。

生徒の思考の流れがわかる

生徒の思いや考えを吹き出しで示し、どのように作品を発想し、構想を練りながらつくっていったかわかるようにしました。

複数の生徒の制作過程を紹介

発想や構想のしかたが異なる2名と1組の生徒の制作過程を紹介。左上は大阪、左下は秋田、右上は北海道の生徒。

他教科とのつながり

他教科との関連を示しています。この題材では、数学科の空間図形で学んだ立体の展開図を紹介しています。



「体感ミュージアム」

多様なQRコンテンツと一緒に作品を観て、鑑賞を深める題材です。



書き込みツール&高精細画像

鑑賞図版を拡大したり、線やせりふを書き込んだりして、鑑賞を深めることができます。



作家解説動画「レオナルド・ダ・ヴィンチ」

レオナルドの生涯や代表作を5分で解説。



用語解説動画「ルネサンス」

美術史における「ルネサンス」を5分で解説。

生徒の工夫がわかるインタビュー動画

——新しい試みとして、「みんなの工夫」の紙面のQRコードから、作者のインタビュー動画を視聴できるようにしました(本誌P.7参照)。これも先生方からのアイデアで生まれたものです。

田中 生徒の思いがストレートに伝わり、とてもいい動画になりましたよね。紙面には掲載しきれなかった、生徒の細かい工夫点がわかります。

宣 私は授業でこの動画を、制作の合間に見せたいですね。生徒が制作しているときに、教科書にはこういう作品があるんだけど、ちょっと見てみようか、と。生徒たちは同世代の声に敏感です。刺激を受けて、作品がよりよくなっていくはず。

田中 私は最初に作品だけ見せて、そのよさや工夫点を考えさせ、その後「それでは作者はどう考えていたんだろう」と投げかけてこの動画を見せたい。主題を表すのに、この作者はどう工夫しているのかなって。

更科 小規模校ではすごくありがたい動画だと思います。私の学校の周辺には十数人規模の学校がたくさんありますが、限られたメンバーしかないというときに、こういった動画があるとモチベーションが上がります。同世代が考えていることというのはとても刺激になりますよね。

鈴木 新任や免許外の先生方にも授業のポイントがすごくよく伝わる動画ですね。考えさせるポイント、見取りのポイントがよくわかります。

コンテンツで鑑賞を深める「体感ミュージアム」

——1人1台端末になったことを受けて、今回、「体感ミュージアム」



更科結希

さらしな・ゆき

北海道生まれ。北海道教育大学附属釧路義務教育学校後期課程教諭。北海道教育大学卒業後、北海道釧路町の公立中学校教諭を経て、2012年4月より現職。北海道教育大学大学院修了。著書に『中学校美術の「学び合い」題材&授業プラン』(明治図書 2023年)。光村図書中学校『美術』教科書の編集委員。

という鑑賞題材を設けました。紙面のQRコードから多様なコンテンツを視聴して鑑賞を深める題材です。端末を活用しながら、体感的に鑑賞できます。

堤 豊富なコンテンツをいろいろと試してみたいです。たとえば「書き込みツール&高精細画像」(本誌 P.8 参照)を使ってどんな授業ができるか考えてみるのはおもしろそう。

田中 鑑賞の授業は準備が大変なので、作家の解説動画などがあると、とても助かります。限られた授業時間で、作品が生まれた背景までしっかり教えることができます。

堤 これまでは、YouTubeの動画を見せたり、ワークシートを自作したりしてきましたが、新版教科書では、それがQRコンテンツとして全部用意されている。さらに指導書に授業例があれば、鑑賞を苦手と感じている先生でもスッと取り組めると思います。

——美術史用語の解説動画もあります。たとえば「ルネサンス」「印象派」について、5分程度にまとめています。

田中 情報を凝縮した、わかりやす

い解説動画ですよ。『印象派』などの用語を、美術史の文脈できちんと解説しようとすると事前準備が大変なので、とても助かります。こういった動画があれば、鑑賞の時間ももっと豊かになるでしょうね。

自分の表現方法を見つけられる別冊『資料』

——新版教科書では、技法や色の資料を別冊にしました。

鈴木 教科書の資料部分が別冊になっていたといいのにと、ずっと思っていたので、この別冊『資料』が実現してとても嬉しいです。まず、表紙がかっこいいですよ(笑)。いろいろな描画材や材料があって、見ただけでワクワクする。ページを開くと、中学3年間で必要な資料がギュッと凝縮されています。

田中 36ページという分量もコンパクトでいい。ほしい情報にすぐ到達できます。実用的で、3年間活用できる資料集だと思います。

宣 紙面に掲載されている情報は簡潔にまとめられていて、詳細はQRコードから動画で見られるようになっています。これが、今の生徒たちの感覚に合っていると感じます。

堤 生徒たちは、興味をもった技法について、自由にQRコードから動画を見て理解を深めていくでしょうね。自分が知りたいタイミングで、自分の知りたい情報に触れるというのが個別最適な学びだと思います。

宣 入り口がたくさんあるのがいい。そのための最初のスイッチを押すのが教師の役割だと思います。

田中 主題生成のときに私たちがどう関わるかですよ。主題が生まれたら、あとは生徒が別冊『資料』を見ながら好きな表現方法でどんどん

別冊『美術1 資料』

技法、色彩、思考ツールなど、中学校美術に必要な資料を1冊にまとめました。(詳細は本誌P.12～13参照)



制作を進めて、作品ができあがる。そんな授業ができれば、理想だなと思います。

発想を広げるために

——今回、1年の導入として「発想のしかたはさまざま」(『美術1』P.14～15)というページを新設しました。先生方とゼロから考えて生まれたページです。



鈴木雅之

すずき・まさゆき

東京都生まれ。宮城県柴田郡大河原町立金ヶ瀬中学校教頭。東北生活文化大学生活美術科卒業後、1995年より宮城県公立中学校、宮城県立中高一貫校、宮城県美術館などで勤務し、2023年より現職。現在教頭職4年目。光村図書中学校、高等学校『美術』教科書の編集委員。

田中 一つのモチーフからさまざまな発想ができることを伝えるページがほしいと、以前から思っていました。ただそれをどう紙面に落とし込めばよいかかわからず、編集部と何度も議論をしましたね。

堤 私たちは編集者ではないので、「こんなページがほしい」というイメージを伝えることしかできません。編集部と相談しながら、少しずつ紙面に落とし込んでいく作業は、とてもおもしろかったです。

宣 一つのモチーフから、こんなに発想が広げられるんだということが、伝わるページになりましたね。

堤 作品というのは、いわばゴールです。でも、ゴールよりもスタートを大切にしたいという私たちの思いが形にできたと思います。

鈴木 メッセージ性のある魅力的なページになりました。1年「絵や彫刻など」の導入として位置付けているのもいいですね。

ワクワク感を大切に

——先生方が編集会議でいつも言われていたのは「生徒がワクワクするような教科書」ということでした。そこはかなり意識しながら編集した

つもりですが、いかがでしょうか。

田中 まず図版が大きくて刺激的です。作品の選択も、インパクトはもちろんですが、丁寧に見ていくと、生徒たちが間いをもちそうな作品、言葉が出てきそうな作品が選ばれているのがわかります。

更科 『美術2・3』P.27～42「日本の絵画を楽しむ五つのキーワード」(本誌P.16～17参照)は、五つの切り口がとてもいいですね。日本の絵画の振り幅の大きさが、ギュッと凝縮して見えてきます。風合いのある用紙に印刷されていて、生徒たちが絶対に飛びつくページです。

鈴木 生徒の作品でも、作家の作品でも、迫ってくるようないい作品がとても多いです。そのバランスがいい。それから、『美術1』も『美術2・3』も、巻頭と巻末の「うつくしい!」の写真がすごくいい。すべて教科書のために、写真家が撮りおろしたそうですね。この写真によって教科書全体を貫くものが見えるようになっていと感じます。谷川俊太郎さんの言葉ともよく合っている。

堤 『美術2・3』P.54～55「今の自分、これからの自分」の最初のページ(本誌P.11参照)が好きです。生



宣 昌大
そん・ちゃん

大阪府生まれ。大阪教育大学附属天王寺中学校教諭。京都精華大学芸術学部造形学科卒業後、家具職人、大阪府公立中学校教諭を経て、2022年より現職。兵庫教育大学大学院学校教育研究科修了。光村図書中学校『美術』教科書の編集委員。

徒の思いが大きな文字で載っていて作者の伝えたいことがダイレクトに届いてきます。まさに生徒の心に響く紙面づくりだと思いました。

——このページには「人生の花」という堤先生の授業で制作された作品を掲載しています。

堤 自画像の題材では、自分の顔を描くのに抵抗感がある生徒もいます。そこで、顔でなくても自分の内面を表すことはできるのではないかと思います。花で自分を表現させることにしました。この題材は兵庫県のある先生の実践をベースに、自分なりにアレンジしたものです。普通に投げかけると生徒は花を描きますが、人生を描く題材だから花に見えなくていいんだよと、最初に伝えました。

——「今の自分、これからの自分」には、顔を描いていない作品や悩んでいる生徒の作品も掲載しました。それは先生方との会議で、劣等感や悩みを抱えている生徒もいっぱいいるとお聞きしたからです。

鈴木 思春期まっただなかですから、悩みを抱えている生徒は多い。そんな生徒たちが「自分だけじゃないん



自分自身を作品に表す題材。新版教科書では、背中を向けた自分を描いている作品、立体で表現している作品、抽象的に表現している作品など、多様な作品を掲載しました。

だ」と思える作品を掲載したいと思いました。このページの右下の作品(「降り注ぐ雨は、僕が流した涙」という言葉とともに掲載されている作品)も、すごくいいですね。

田中 生徒たちには、今しかできない表現をしてほしい。「今の自分、これからの自分」は、主題が生成しやすい構成だと思いました。この紙面を見せるだけで生徒は主題を生み出せそうです。

生徒と並走する教科書

——最後に、教科書をこんなふうに使ってほしいというメッセージをお願いします。

更科 授業の最初のきっかけが必ずある教科書です。紙面の言葉をそのまま生徒に投げかけても授業が成立する構成になっています。なので、まずは教科書をそのまま使ってみて

くださいと言いたいです。

堤 各題材ページや「体感ミュージアム」は導入で使いやすい構成になっています。「みんなの工夫」は発想・構想の段階で使えます。そして制作が始まったら別冊『資料』を使う。授業のどの段階でも使えるようにつくられています。

田中 生徒が自分で自分なりの答えを導き出すことができる教科書になっています。授業でどんどん活用してほしいです。

鈴木 教師がこのページを開きなさいと指示するのではなく、生徒が自分で必要なページを見つけて開く。いろいろな紙面を眺めて、教科書全体を見渡ししながら、自分の好きなところを見つけてほしいです。

宣 教科書を使って生徒と一緒に考えたり、生徒にこれあるよって示したり、そういう生徒と並走していく

ための教科書になりましたよね。

——本日はありがとうございました。

『美術1』P.14～15「発想のしかたはさまざま」



リンゴという一つのモチーフから、さまざまに発想を広げられることを紹介したページ。



堤 祥晃
つつみ・よしあき

滋賀県生まれ。滋賀県高島市立安曇川中学校教諭。滋賀大学教育学部卒業後、2001年から滋賀県公立中学校の教諭を務め、2018年4月より現職。「第55回 教育美術・佐武賞」佳作賞、「第70回 読売教育賞」優秀賞を受賞。滋賀大学大学院教育学研究科修了。光村図書中学校『美術』教科書の編集委員。